

るようになってからは昼食会になり、その後、ほとんどの人が「毎日が日曜日」状態になってから今の形にした。この形になってからはご夫人の参加者は無い。何年かホテルの玄関近くのレストラン（昼食は予約を入れておけばその場で席を設えてくれる）でやるうちに、あるメンバーが見付けて、使ってみたら具合が良いので場所が固まった。

決め手は、約束事を日取り、時刻および場所に限り、その他は自由に行っていること、および良い場所を得られたことと考えている。都心の駅そば、昼休み終了時刻を狙い、サラリーマンと入れ替わる形で、毎度予約無しで10人程度の席を必ず確保できる。終了時刻の制約が無い・・・など。

いろいろな機能低下の歳を迎えて、心置きなく情報交換できる仲間が多数居ることは大変に心強く、武蔵でバスケットやったことが本当に有難いことになっていてと皆が思っています。仕事々々でやってきて、高齢になって良い仲間が得られないで寂しい思いや不安な思いをしている方は多いですが、お蔭様で我々は恵まれています。

議論はとことんする、ただ、お互いに他の人の考えを否定はしない。他人の考えを聴いて自らの考えを再考する、そういう仲間なのです。現役・部活動の中でそんな関係ができたのです。だから仲間の絆が続くのだと思います。これが全てです。

「HGC」の名の由来

当時、先輩方が年次ごとに自己の仲間の名をつけていました。最初は25期が「KIR」規則違反連盟、26期が「EGC」?という具合です。27期、28期は人が少なく、同期の固まりは出来なかつたようです。29期は2年生までで部活動をやめた人たちも最後まで現役を続けた人も、仲間意識は全員が現役時代と同じの付き合いが続けていました。高校1年生のときの15名です。3年生の秋、全員の現役活動が終わってもこの仲間の絆は変わらず続きました。それは今日まで続いています。

3年生の夏休みが終わって間もなく、誰からともなく「仲間の名前を付けよう」との声が出ました。25期、26期の影響を受けたことは間違いありません。何度か話し合う内誰かから「HGC」はどうかとの提案があり、各人の勝手な解釈で言い合った後に、「呼びやすいからこれでよし」、呼び方は「ハー！ゲー・ツェー」と決まりました。丁度独逸語が学科に取り入れられて習い始めていたことから、独逸語被れの空気があったのです。

何の略か、意味は何か、確定的なことは誰も分かりません。各人の勝手な解釈ですから。敢えて統一した意味付けはしなかった、というより出来なかつたように思います。意味を訊かれて答えなければならぬ時は「品行方正、学術優秀者クラブの略号」と答えるという統一解釈・申し合わせが作られました。

## 卒業後節目10年毎のOB報告

幅広い年代と分野で活躍されているRKM会員からの発信量も多くし、相互交流の一助とする目的で、卒業後10年／50年の各節目の年のOBから、現役時代の想い出や近況について報告してもらうことにしました。今年は一桁目に8のつく期の人たちです。来年は9のつく期の人にお願います。また次の節目になりますので多くの人から発信される機会がつかれます。これを100年史の一章として残していきたいと考えます。皆様のご協力をよろしくお願います。

### 文武調和

78期 木本 健一

武蔵バスケット部を卒業してから約10年、この言葉の意味がようやく分り始めてきました。バスケットを頑張るのも、勉強を頑張るのも同じ一人の人間のやること。バスケットも勉強も、同じものとして真剣に取り組み成果を上げる。目の前のものすべてに全力を注いで活動することの大切さを身染みて感じています。

現在私はコンサルタントとして働いています。コンサルタント業務は、全体像を常に描きながら、

現在の業務の位置付けや重要性を頭に入れて、効率よく質の高い成果を上げることが求められます。また、複数のプロジェクトを掛け持ちして働くこともあります。一つのことに集中しているだけでは到底務まりません。

そして、コンサルタントとして働く傍ら、多岐にわたって活動の幅を広げています。武蔵の教師になり、バスケット指導に携わる夢を叶えるため、教職の勉強もしています。バスケットの審判の資格（JBA公認）を取るべく、審判活動にも力を入れています。「右脳を活性化」をキーワードとして、「英語速読」筆ペンを使ったアート作品を描く「己書（おのれしよ）」、会議でなかなか表面化されない、参加者の隠れた気持ちを可視化する「グラフィック・ファシリテーション」など、多くの活動に参加し、ワークショップの開催を行っています。

これだけたくさんすることに手を伸ばすと、時間が足りず、消化不良を起こしそうですが、全てのことに対して、同じ姿勢で取り組む。全力で取り組む。これが続いていると学びのスピードが上がります。吸収力があるんです。武蔵バスケット部で学んだ物事に取り組む姿勢が、私生活にも、ビジネスにも活かしていると実感しています。まだまだ成長段階ですが、文武調和の精神で、今後も活動の幅を広げていきたいと思っています。

## ストリートバスケットリーグの展開

68期 小野田 博彦

現在、3on3形式のバスケットリーグを全国的に行う「SOMECITY（サムシティ）」というものを運営しています。SOMECITYは、東京、大阪、仙台で3on3のリーグ戦を興行として定期的に行い、その他各地方都市でもトーナメント戦を行い、毎年3月にそれらの優勝チームを集めて決勝大会を行っています。実施規模、実力共に国内では最高峰の3on3イベントとなり、開始から7年目を迎える積極的に拡大中です。



3 on 3形式のバスケットは近年、「3X3（スリーバイスリー）」という名称でFIBAにより競技化もされ、2020年の東京オリンピックからの採択へ向けて、積極的に活動をしています。日本でのストリートバスケットという市場はまだ始まったばかりですが、こういったオリンピックへのヨコシマな期待もあって俄かに盛り上がりを見せ始めています。

元々私の会社はバスケット関連のサイト運営や開発等を行っており、近いところにはいましたが、SOMECITYを立ち上げた人間が6年前に入社してきたのがきっかけで、急激にストリートバスケットの距離が近づきました。その後、SOMECITYの運営会社が経営上の都合で譲渡したいという状況になり、ある意味元の持ち主のところに戻ってきた次第です。

これらのバスケットに関する事業はまだ市場も小さく楽なビジネスではありませんが、やる人間の熱意は非常に高く文字通り人生をかけているし、彼らはその為の自己犠牲は何とも思いません。自分達の仕事で得られるもの、例えば顧客の興奮、選手達の情熱に溢れたプレー、これからできるであろう展開の可能性、外でバスケットをした時の雰囲気等、得られる（金銭面以外での）報酬は大きく、充実した日々を送っています。彼らは好きなことを仕事にして、夢を持って、毎日充実して、メシが食える

なんて最高だろうと羨ましがられることもあります。ただ経営者として未熟な故でしょうが、成功するまで執念で続けて血へドを吐きながらそこに辿り着くことが果たしてラッキーと言えることなのか、私にはまだわかりません。

SOMECITY設立の趣旨としては日本を外（ストリート）での「日常の」バスケットを定着させたことから始まったものであり、観るにしろするにしろバスケットを楽しむ人を増やすことが命題となっています。昨今ではプロや大学のトップ選手を呼んだり、週刊漫画誌に掲載されたりで知名度も若者中心に徐々にあがっている・・・つもりでいたのですが・・・先般の総会で新大学生に聞いてみたところ、SOMECITYも3X3も全く何にも知らなかったの、少々反省しました。知名度をあげる方法をご存知の方、どうかお知恵をお貸しください。

またご興味がある方はご一報いただければご指導ご鞭撻と引き換えに、関係者席をご用意しますのでお気軽にお申しつけください。日程等は、SOMECITYのWebサイトをご確認ください。

## バスケット部卒業30年を振り返って

58期 松本 一郎

卒業後30年。1浪して早稲田に入り、平成元年（1989年）、朝日生命保険に入社、今年2014年5月に現在の会社に転職するまで、7社、6都市を渡り歩いたが、バスケットから離れたことは一度もなかった。いや、むしろ自分のこれまでの人生はバスケットともにあつたといつてもいいであろう。

中学時代はコーチに恵まれず、わずかに1勝に終わったが、高校時代、キャプテンを務めた3年生のインターハイ予選では5回戦に進出。後に実業団入りするポイントガードと207cmのセンターを擁し、東京都2位となった関東高校を相手に42点差で敗れたが、ベスト16入り。春の新人戦本大会で同校に99点差の大敗を喫したことをバネに、日夜、練習に明け暮れた結果、点差を57点縮めることができたことに納得して引退した。

大学では、体育会ではなく同好会に所属したが、敵にも味方にも全国大会経験者がゴロゴロいて、ゲーム前のアップでボースハンドのバックダンクが炸裂するような環境下で、初めてスタメン落ちの屈辱を味わった。しかし、この時、高校時代に散々、叩き込まれた運動能力が劣っていても、観察と

予測、準備を武器に戦い得る道があることを改めて発見し体得した。自分より背が小さく脚力もないスタメンのポイントガードの動きを舐めるように観察したのがキッカケだった。最終的に、ディフェンスとファーストブレイクのスペシャリストとしてシックスマンの地位を確立したが、アウトサイドシュートに課題を残したまま卒業した。

自分のバスケット技術が大きく進歩したのは、社会人になってからだ。元々、得意だったディフェンス、ファーストブレイク、ドライブイン、アシストパスに加え、スリーポイントシュートも決められるようになった。ジャンプシュートを捨ててセットシュートに絞ったことで飛距離が伸びたのだ。こうなると、もう怖いものなし。転勤で北海道の中標津町にいたこともあり、実業団や大学の体育会OBと対戦することがないのをいこととに点を取りまくった。アペレージで30点を超えていたと思う。弱小だったチームを釧路市内の強豪チームと渡り合えるレベルまで牽引し、町の小学生のレベルアップにも貢献して全道大会出場への道を拓いた。

その後、転勤で海外に赴任したが、激務の合間を縫って、バスケットもしつかり続けていた。NYでは日本人駐在員のチームに入り、市の体育館主催のコーポレートリーグで準優勝。後にエンタリーした

アンリミテッドリーグでは、チームメイト全員が日の丸を背負っているつもりで、10cm以上の身長差がある黒人たちに、目の色を変えて真剣勝負を挑み、互角以上に戦った。自分のバスケット人生が飛躍的に発展したのは、大学時代以降だが、その基礎を身につけたのは、間違いなく高校時代。畑公というバスケットボールに生涯を捧げた恩師のお陰である。自分のカラダには、いろいろな技術が、彼の言葉とともに深く刻み込まれている。「一歩目は低く大きく」「パスはノーモーションで」「突然、動き出せ」こうした技術の水準がいかに高度なものであるかは、アメリカでの黒人たちとの対戦を通じて実証済である。そして、自分は今も現役として、まだまだ進化を続けている。体力は年々、落ちて行くが、観察、予測、準備の質が、それを上回るスピードで高まって行くからだ。



2014年元旦バスケットでのプレー